「神道・皇室研究会」報告

神社の起源と祭りの伝統

茂木　貞純
（國學院大學神道文化学部教授）

はじめに　――日本列島の特色――

日本列島は、朝鮮半島の南端から約二〇〇キロ離れたところに位置する。間には対馬海峡があり、ちょうど中間地点のやや半島よりに対馬列島が横たわっている。宗像三女神を祀る宗像大社の沖津宮は、玄界灘の沖ノ島に鎮座し、宗像市田島の辺津宮から約六〇キロに位置する。沖ノ島から対馬までも約六〇キロである。この沖ノ島は、古来神職のみが渡島を許される神聖な島で、上陸時には禊が義務付けられ、女人禁制で、島内の一木一草一石をも持ち出してはならないとされてきた。昭和二十九年から三次にわたり発掘調査が行われ、四世紀後半から九世紀後半に至る宗像女神に対する祭祀遺蹟が発見された。発掘遺物は八万点に及び、すべて国宝に指定された。

宗像三女神について、日本神話は「日神の生みませる三女神を以て筑紫洲に降りまさしめ、因りて教へ曰く、汝三神宜しく道の中に降居して、天孫を助け奉り、天孫の爲に所祭よと。」また「三女神を以て、葦原中國の宇佐嶋に降居さしむ。今、海北の道中に在す。號を道主貴と白す。」（『日本書紀』）と記していて、海上交通要衝の神として信仰されるとともに、その祭祀伝統の起源を伝えている。発掘遺物は、中国大陸や朝鮮半島との古くからの交流の歴史を伝えるとともに、辺境の孤島で天皇の祭祀が行われてきたこ

とを示している。

半島と隔たること二〇〇キロという距離は、日本列島に固有の文化を育てる大きな要因となる。大陸との交流を可能にするとともに、遮断もできる距離であった。大陸半島からの先進文化の影響を受けながらも、独自の伝統を保持発展させることを可能にした。平安時代前期に遣唐使が廃止され、国風文化興隆の転機となったのは、その良い例である。おそらく古代から交流と遮断の歴史が繰り返されてきたのである。

日本列島は、神話では大八嶋と呼ばれ、淡路島、伊予之二名嶋（四国）、隠岐嶋、筑紫嶋（九州）、壱岐、対馬、佐渡、大倭豊秋津嶋（本州）の八つの主要な島からなるとされた（『古事記』国生み神話）。この日本列島には、北から寒流親潮が流れ、南からは暖流黒潮が流れてくる。親潮は千島列島に沿って南下し、列島の東まで達して黒潮とぶつかり東方へ流れてゆく。親潮の名は栄養塩に富み、沢山の動・植物プランクトンを育て、好漁場となることに由来するという。

黒潮は、東シナ海を北上し日本列島の南端で二手に分かれ、主流はトカラ海峡を通り列島の東側を北上して、房総半島から三陸沖に至り、親潮とぶつかる。一方、日本海側に流れ込む対馬海流は列島に沿って北上し秋田県沖に至る。黒潮は、プランクトンは少なく海水は透明度が高く、青黒く見えることに由来する。黒潮の主流には鰹や鮪が回遊し、対馬海流には鰤が回遊してくる。親潮、黒潮の寒暖流が、日本近海で交わることに依って、豊富な漁業資源が生まれることとなる。

日本列島は、地殻の面から言うとユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートの四プレートの境界部に位置して複雑な地形上にある。稀に見る不安定な地殻の上に日本列島は位置している。列島の中央部を南北に横切る糸魚川―静岡構造線は、ユーラシアプレートと北米プレートの境界である。列島の東側に沿う水深八〇〇〇メートルの日本海溝は、北米プレートと太平洋プレートの境界で、太平洋プレートはここで北米プレートの下に絶えず沈み込んでいる。また、駿河トラフ、南海トラフと呼ぶ深い谷が駿河湾から四国沖にあり、これがユーラシアプレートとフィリピン海プレートの境界で、ここではフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下に沈みこんでいる。従って世界有数の地震多発地帯であり、火

山活動多発地帯となる。地球上の火山の凡そ一〇％が列島に存在するという。

列島の大部分は山地で、国土の七五％に及び、しかも火山地帯の非常に脆弱な地質で台風、豪雨により洪水や地形が変わるほどの災害が発生、更に地震、地滑り、火山噴火、津波などの自然災害は、止まることなく人々の生活を脅かした。因みに現在も国土の六〇％が森林に蔽われている。山地は高山が多く、そこを水源とする河川は急流となって海に注ぐ。

日本列島は、大部分温帯気候に属し、四季の変化が明確で、冬の季節風と日本海側の豪雪、初夏の梅雨と長雨、夏から秋の台風と豪雨が特徴である。温帯湿潤気候とも呼ばれて、季節風があり、冬は低温で、夏は高温で雨が多い。温暖で多雨の気候は、農業の発達を促すことになる。春夏秋冬、四季が明確にめぐり、時間が回帰して、毎年同じことを繰り返す。「春耕秋収して年紀と為す」(『魏志倭人伝』)と記録されていて、農業のサイクルで年を数えて来たという。古語の「とし」は、もとは稲の実りを意味し、後に一年の意に転じた。稲作農業に適した環境であったのである。

この日本列島に私たちの先祖は、生活を打ち立てたのである。約一万五〇〇〇年前に縄文土器を使用する人々が現れる。縄文時代は約一万年続き、独自の発展をとげる。一万年も続いた多様な縄文時代を単純化することはできないが、土偶や石棒、縄文土器の存在は、縄文時代に何らかの信仰が存在したことを推測させる。人々は竪穴住居に棲み、弓矢を使用する狩猟、巨大な貝塚を伴う漁労、栗や橡などの木の実採集と栽培、ヒスイを珍重し装身具にし、漆文化を発展させた。集落には墓地の存在も確認されている。日本文化の核になる要素がすでに存在する。

今から約三〇〇〇年から二八〇〇年前、北部九州に稲作栽培技術が伝わり弥生時代となる。稲作栽培は数百年かけて、本州北端にまで及んでいる。水田と灌漑技術、高床式の倉、鋤や鍬の農耕具、鉄器具の普及、弥生式土器、定住集落は大きくなり村を形成して、これまでの生活体系を根本的に変えて行く。縄文時代に発展した文化を基盤にして、水田での稲作栽培の普及や生産技術の向上は、列島の隅々にまで根本的な変化をもたらした。春に豊作を祈り、秋に感謝する神社祭祀の起源は、弥生時代に求めることが可能であろう。弥生時代には、大陸からもたらされた銅鏡、刀剣類に加えて勾玉を大事にする文化も生まれる。弥生時代

は約一〇〇〇年続いたということになる。

その後三世紀に古墳時代となる。生産技術の飛躍的な発展に伴い、経済格差も増大して、首長の巨大な墳墓としての古墳が築造されるようになる。古代王権の濫觴期である。大和の纒向地方に日本最初の都市ができ、ここに出現した前方後円墳は、日本固有の墳墓形式と言われ、全国各地に築造されるようになったという。前方後円墳が造られなくなる六世紀後半までが、古墳時代で、その後文字記録の残る歴史時代、古代王権の所在した飛鳥に因んで飛鳥時代に繋がってくる。やがて八世紀初めには日本最古の古典である『古事記』『日本書紀』が編纂されることとなる。ここには日本神話が記録され、神話から歴史時代に繋がる独特の歴史観によって編纂されている。

こうした前提のもとに日本固有の宗教である神道、神道の具体的表象である神社の起源とそこで営まれる祭祀伝統について考察したい。

1、日本神話が伝える日本の誕生

我国は固有の文字を持たず、漢字の習得により、初めて文字記録を残すことが可能になった。ただ日本語の伝統は根強く、漢字漢文の習得と共に、日本語を漢字の音を用いて表記する方法を発達させ、万葉仮名を発明することになる。また、漢字を本来の発音の音で読むと共に、日本語で読む訓読を行った。

音訓両様の読み方は、日本語を表記するときに便利で、固有の古語で表記された『古事記』（和銅五年・七一二）を成立させた。『古事記』は第四十代天武天皇の発意により、側近の稗田阿礼に誦み習しめて来た伝承を、太安万侶が最終編纂したものでる。太安万侶は古語を表記するに、漢字の音訓を用いる苦心を吐露しているが、その結果古い日本語の世界が残されることになった。『古事記』は神代から第三十三代推古天皇までの歩みを記述し、全三巻である。

一方、『日本書紀』（養老四年・七二〇）は政府内に史局を設けて多人数が編纂に当たり、最終的に天武天皇の皇子である舎人親王が完成し献上された。格調高い漢文で記されると共に、複数の伝承を並列列記していて、諸家に伝わる伝承を平等に扱う編集方針を知ることが出来る。基本的には古伝承を漢文に翻訳したもので、神代から第四十一代持統天皇まで全三十巻である。国際社会の読者を意識して、

日本の歴史を発信するものとなっている。

『古事記』『日本書紀』は、成立の事情と表記方法が異なるが、その内容はほぼ一致している。古伝承は幾通りもあったが、大筋は同じものであった、というのが真実なのであろう。次に主要な神話を紹介して、その意義を考えてみたい。

国生み神話

世界の始りに関する伝承があり、引続き男女の始祖神が誕生する。伊邪那岐命、伊邪那美命は、海の潮が自然に凝り固まったオノゴロ嶋に降り立ち、結婚して大八嶋と呼ばれる日本列島を生むことになる。大日本豊秋津洲（本州）、伊予二名洲（四国）、筑紫洲（九州）、隠岐、佐渡、対馬、壱岐、淡路島の島々を生み、その次に海、山、野、草、木、風、火などの神々を生んでゆく。最後に天照大御神、月読命、須佐之男命が誕生する。国土は神々の結婚の所産であり、国土の上にある山川草木ことごとく神が宿り、神性を帯びるという信仰は、日本列島に生活を打ち立てた人々が形成し伝えたものである（神名表記は、記紀両方を用いている）。

伊邪那岐命は、天照大御神に高天原（天上の神々の世界）、月読命に夜食国（夜の世界）、須佐之男命に海原を治めるように命じた。ところが須佐之男命のみ命令に背き、亡き母神の所へ行きたいと駄々をこねて、ついに追放されてしまう。追放の前に姉神の天照大御神に暇乞いの挨拶に行き、高天原で稲作栽培の妨害という重大事件を引き起こす。収穫感謝の新嘗祭の祭場を汚物で汚し、奉献する神衣を織る機織女も怪我をするほどの悪戯を行い、ついに天照大御神は天岩屋戸に籠ってしまう。すると真暗闇となり日常秩序が破壊され、万の災いが一度に発生して大混乱に陥る。

天岩屋戸神話

八百万の神々は、川原の広場に集まり、協議して、天照大御神が再び出現し高天原を治めて戴くよう図る。布刀玉命は山から大きな榊を採ってきて、岩戸の前に立て、榊に勾玉、鏡、紙垂をつけて、庭火を焚いた。天宇受売命は岩屋戸の前に桶を伏せて、その上に乗り手に笹の葉を以て神楽舞を舞い、天児屋根命は祝詞を読み祈念した。天宇受売命は神憑りして裸になり、八百万神は大笑いをすることになる。

天照大御神はこれを怪しいと感じ、岩戸を細目に開けたという。そこを天手力男命が岩戸を開け、御手を以て引き出すと、光が満ち災いが止み秩序が回復したと伝えている。天岩屋戸の前には注連縄を掛け、再び戻れないようにした。布刀玉命は忌部氏、天児屋根命は中臣氏、天宇受売命は猿女君の祖神で、古くから皇室の祭祀に奉仕した氏族で、後に古代律令国家が成立すると神祇官の官僚となり奉仕している。神祇官は、一般行政を担当する太政官と並立して置かれた役所であるが、法律条文の順番では冒頭に記されていて、我国が神事を優先してきた形を伝えている。また、天照大御神は太陽神であり、最高至貴の神として信仰され、秩序を維持し、皇室の祖神として位置付けられる。

八俣遠呂智退治

高天原から追放された須佐之男命は出雲国の肥河上に天降る。そこで童女を囲んで泣く老夫婦に出合う。わけを尋ねると、私たちには八人の娘があったが、毎年八俣遠呂智がやって来て、娘を食べてしまい、今年もその時になった、と返答した。八俣遠呂智は、頭が八つ尾も八つ、目は赤いほおずきのようで、背に苔や樹々が茂り、腹は常に血がただれている。須佐之男命は強い酒を醸して待ち受け酔わせて斬殺する。すると遠呂智の尾から霊剣が出てきて、不思議に思い天照大御神に献上する。毎年繰り返される斐伊川の洪水とたたら製鉄の起源を暗示する神話である。

須佐之男命は助けた娘、櫛名田比売と結婚して、沢山の子孫に恵まれ、大国主神が誕生する。神婚に際して須佐之男命は「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」と詠った、これが和歌の起源である。

大国主神は、各地に妻問して子孫が繁栄して行く。古伝承は「此の国を作り堅めたまひき」(『古事記』)「天下を経営りたまふ」「病を療むる方を定む」「禁厭之法を定む」(『日本書紀』)と大国主神の国造りを称えている。文字通り、大国主神として成長し、偉大な統治者となって行く。

国譲り神話

天照大御神は、「葦原中国は我が御子の知らさむ国ぞ」と宣言され、国を治めるため高天原より降臨するように命ぜられる。しかし、地上には荒ぶる神々が跋扈して、簡単に治められる状況ではなかった。そこで天より何度も使者が遣わされ、国譲りの交渉が開始される。最終的に武甕槌

神と経津主神が派遣され、大国主神との交渉が行われて、平和裏に国譲りが成立し、国土が献上される。その時、天照大御神は、大国主神の住む天日隅宮を造営し「柱は則ち高く太く、板は則ち廣く厚くせむ」と方針を示している。これが出雲大社の創建由来となっている。また、天照大御神は「汝が祭祀を主らむ者は天穂日命是なりと」と勅され、出雲国造家が代々祭りを司ることを示されている。

平成十二年、境内より古代神殿の宇豆柱と思われる柱が発掘された。直径一四〇センチの杉柱を三本束ねたもので、この柱で構造された神殿は、高さ四八メートルに及ぶものと推測され、巨大な古代神殿の存在を証明するものとなっている。平安時代の『口遊』（源爲憲著）に記された数え歌に「雲太、和二、京三」と歌われ、雲太すなわち出雲大社の神殿が最も大きく、次いで大和の大仏殿、京の大極殿の順であったという。この伝承も巨大神殿の存在が現実のものであったことを証明する。出雲国造家の千家に伝わる「鉄輪造営図」に、三本の柱を束ねて構造する図面が描かれていて、これも巨大神殿の存在を示している。

天孫降臨神話

平定された国土に天照大御神の孫の天津彦彦火瓊瓊杵尊が高天原より天降ってくる。降臨する場所は、筑紫の日向の高千穂峰である。朝日のあたる東向きの斜面で、稲穂を高々と積み上げた峰である。彦は日子で太陽の子、火瓊瓊杵尊は、稲穂が賑々しく稔ることを象徴する神名である。この時、天照大御神は、瓊瓊杵尊に大切な言葉を与えている。三大神勅と呼ばれるものである。以下、神勅を紹介する。

① 豊葦原千五百秋之瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣、寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮無かるべし。

② 吾が児、此の寶鏡を視まさむこと、當に吾を視るがごとくすべし。興に床を同じくし、殿を共にして、斎鏡と爲す可しと。

③ 吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、亦吾が児に御せまつるべしと。

ここに天皇統治の由来、宮中祭祀の起源、稲作の起源など国家の基本となる柱が、神代に確立し現代に至ったこと

が知ることが出来る。

皇孫は、その後大山祇神の娘木花開耶姫と結婚し、海幸彦、山幸彦の兄弟を生む。兄弟は互いの得物を交換して漁猟をおこなうが、山幸彦は兄の釣り針を失くし、海神の国を訪れて釣り針を探す。無事に発見し兄に返却するとともに、後を継いだ山幸彦は海神の娘豊玉姫と結婚し、子孫が繁栄して、更に一世代後に神日本磐余彦尊が誕生する。

神武天皇東征伝承

神日本磐余彦尊は、国の中心は東にあると仰せられ、日向国を出発、船団を率いて瀬戸内海を東上し、浪速の海の奥深く入り、大和川を遡り大和盆地に入ろうとする。しかし賊軍に阻まれて、戦に敗れてしまう。自分たちは日神の子孫なのに日に向かい敵と戦うのは、道に外れていると覚り、熊野に迂回して南側から山中を抜けて大和に入ろうとする。熊野から八咫烏の導きを得て、賊軍を平定し大和の橿原を都と定め、初代天皇として即位された。以来、万世一系で途切れることなく、一二六代今上陛下に至っている。

第十代崇神天皇の時、疫病が流行り、国民の大半が死亡してしまう危機となり、三輪の大物主神の祟りであることが判明し、祭祀を厳重に行うと終息した。この時、宮中で祀られてきた斎鏡の写しを造り、宮中での祭祀を継続されると共に、天照大御神親授の斎鏡は、宮中の外に祀られる様になり、第十一代垂仁天皇の時代に皇女倭姫によって、伊勢の五十鈴川の川上に祀られる。これが伊勢神宮の鎮座の由来である。

このような神話伝承は、一体何時頃成立したのであろうか。稲作の起源神話は、弥生時代以降の所産と想像できる。三種の神器が皇位の象徴とされているが、こうしたものを重視する文化は何時頃成立するのであろうか。勾玉は縄文遺跡からも発見され、古くから珍重されてきた。一方、青銅鏡、鉄剣は当初大陸や朝鮮半島から輸入され、国内でも製作されるようになったものである。鏡は、化粧道具としてしてより、祭祀に用いられたと考えられている。剣も武器としての使用よりも、呪具や儀飾として重んじられてきた。いずれにせよ弥生時代から古墳時代のことである。今後、物の歴史研究が進むことで、神話の背景が解明されることになるのだろう。また、日本神話は古代国家形成と密接な関係があり、この方面から解明が俟たれること言うまでもない。

2、神社の起源とその発展

次に神社の起源について考えてみたい。神話伝承の中に日本の主要な神社の起源が伝えられている。宗像大社の創祀は、三女神の誕生と共に筑紫洲に降って天孫を助け奉れとあることが、起源である。当初から皇室国家と密接な関係があったことが分かる。宗像大社の沖ノ島祭祀遺蹟の事はすでに紹介したが、その内容を具体的に見て行きたい。

宗像三女神は、本土の辺津宮、大島の中津宮、沖ノ島の沖津宮のそれぞれに祀られていて、沖ノ島は、本土から約六〇キロの玄界灘の中央に位置する。人も通わぬ絶海の孤島で、周囲僅か四キロで、絶壁に囲まれている。その南側斜面の中腹に多数の巨岩が露出していて、その磐座を対象として祭祀が行われ、祭祀遺蹟が発見された。四世紀後半から十世紀初頭に至るまで祭祀が継続され、古い順に①岩上祭祀、②岩陰祭祀、③半岩陰半露天祭祀、④露天祭祀と場所が移動し、発見された祭祀遺物にも時代の特徴が顕著であるという。

例えば①岩上祭祀では、銅鏡、鉄製武器・工具類、宝器としての車輪石が発見されていて、神道考古学の笹生衛は、これらは「古墳時代前期・四世紀後半の大和周辺の古墳副葬品と共通し、大和の勢力、恐らく大和王権により、四世紀後半に沖ノ島祭祀が開始されたことを物語っている」と推測している。そして十世紀初頭に祭祀遺蹟が終焉を迎えるのは、その背景に遣唐使廃止が考えられるという。宗像大社の祭祀には、大和王権の遣隋使、遣唐使の派遣に際し、対外交流の成功を祈るものであったというのである。

大和の大物主神を祭る大神神社の起源も神話伝承にある。大国主神との国作り神話に登場して、「能く我が前を治めば吾能く共與に相作り成む。若し然ずば国成り難けむ」（『古事記』）と宣言し、大和の青柴垣の東の山の上に祀るようにいう。これが三輪山に大物主神が祀られた起源譚である。また、崇神天皇の時代、疫病流行は大物主神の祟りであったといい、子孫の大田田根子（大阪の陶邑に住む）を探して、祭祀を行うと疫病は収まり、平穏を回復して、五穀豊作になったという。

大神神社は今も神殿は無く、三輪山を神体山として祭祀の対象としている。三輪山の西側山麓周辺からは祭祀遺蹟が二十六ヵ所で確認されている。拝殿奥の禁足地からは四

世紀前半の土師器甕が出土、狭井川上流の山の神遺蹟からは、宗像沖ノ島遺蹟の岩上遺蹟（四世紀後半）から出土した銅鏡に類似した銅製小型鏡が出土している。こうした情況から三輪山祭祀も四世紀代に始められていた、と推測されている。

五世紀になると明確に祭祀の痕跡が確認でき、その特徴は山麓の磐座を対象にした祭祀で、須恵器と子持勾玉が出土することである。須恵器は大阪の陶邑窯産と考えられていて、大田田根子説話との関連が指摘されている。崇神天皇の時代の疫病鎮圧祭祀に、高温で焼成された須恵器が祭具として使われるようになり、子持勾玉が奉献された、と推測されるのである。

九州の宗像沖ノ島、大和大神神社の祭祀遺蹟は、四世紀に古代王権と関わって神社祭祀が行われていることが確認できた。いずれも磐座祭祀で社殿はない。神霊の鎮まる本殿、人々が拝礼する拝殿などの社殿は、この頃は未だないのである。

建築史家の福山敏男によれば、神社はおよそ二千年以上の歴史を有するが、その長い歴史を確実に跡付けるのは、文献によると奈良時代より遡ることはできず、建築遺構によれば平安後期より古いことは分からない。しかし、民俗学や考古学の提供する資料により、原初の神社の状態を幾分推測することが出来るようになったとする。そして神社建築の歴史を四段階に分けて、次のように分類する。

①神籬・磐境

神話伝承に見られる神籬・磐境は、原始期以来の神祭りの建築的施設であって、後世の神社建築と重要な関係がある。今日、神籬は神霊の依り代となる榊と理解され、磐境は祭場を囲む磐垣、すなわち神霊奉斎の施設と理解されるが、神社建築の源をここに見ている。磐座も神霊の依り代とされ、岩上或はこれに向かって祭祀が営まれたものである。

②神殿のない神社

大神神社は三輪山を神体山として神殿はない。諏訪大社も上社に神殿がなく、奥の森を拝む。石上神宮も古来神殿はなく、拝殿奥の禁足地を神聖な土地として拝してきた。近代になり禁足地の発掘が行われ、大正二年に本殿が建設された。山や森を直接に神々の鎮まる場所として拝する神社があり、その伝統は今も続い

ている。

③仮設の神殿

祭りを行うために臨時に神殿を設け、祭りが終了すると撤去される。天皇の即位大嘗祭に建設される大嘗宮にその典型が見られ、おそらく上代からの伝統を受け継ぐものあろうとする。大嘗宮は黒木造で掘立柱の建物で、南北五間、東西二間、屋根は切妻造で茅葺妻入りとする。屋根に鰹木八本を置き、千木をのせる。壁は蓆を張り、床は竹簀子の簡素なものである。

④常設の神殿

一定の年数で神殿を造り替える式年造替の制は、祭りの度ごとに神殿を仮設していたものが、時代を降るに従って祭神常在の思想が生じ、神殿が常に存在する理由が起こり、耐久的な造った後も、旧慣を残して毎年の新造から幾年かに一度の新造に変化した。伊勢神宮では二十年に一度の式年遷宮を今も維持している。住吉大社、香取神宮、鹿島神宮は、奈良時代から平安時代ころまで式年造替が続いていたが、以後固定化したという。

神社の社殿は、このような四段階を経て一般に常設社殿をもつ現代に至っているが、神殿が立てられないまま、現代に至ったものもあり、現実には様々な様相を示している。

神道史学の岡田荘司は、「神社成立の基本的要件は、地域の集団、氏族により、神を祭るための区画（祭祀空間、モリ）が確定され、その地に仮設・常設の建築的施設（社殿）が造られ、年ごとの祭祀が執り行われることをいう。常設の社殿造営以前の段階で、磐座・神籬を祭祀対象とした神社の原型がかなり長期にわたって展開し、社殿造営は古代律令期に入らないと確認できない事例は多い」としている。その上で「神社成立の淵源は、水田稲作農耕が始まる弥生時代、また縄文時代晩期まで遡るとの意見もあるが、現代の神社に直接結びつくとされる考古学の祭祀関連遺蹟・遺物を通して考察すると、その時期は古墳時代に限定できる」と推測している。宗像や大神神社の祭祀遺蹟から導かれた結論として、七世紀の律令祭祀制が編成されて行く前段階の時代である五・六世紀を、神社成立の勃興期とみなしている。

六世紀半ば第二十九代欽明天皇の時、仏教が伝来するが、仏像や経巻のすばらしさに天皇は驚嘆するが、しかしこれ

を崇敬信仰すべきかどうか、自ら決することなく臣下の意見を諮っている。この時、保守派の物部尾興、中臣鎌子は反対して次のように進言している。

我が國家の天下に王とましますは、恒に天地社稷百八十神を、春夏秋冬に祭拝むことを事と爲したまふ。方今改めて、蕃神を拝まば、恐らくは、國神の怒を致しまつらむと。（『日本書紀』）

ここには神社のことは出てこないが、祭祀伝統はしっかりと確立していることが確認できるのではないか。仏教が伝来した六世紀半には、生産暦に合わせた年間の祭事暦が確立していた、と考えてよいだろう。参考になるのが『魏志倭人伝』（三世紀）の記録である。倭人の習俗を記した中に、倭人の会合では父子や男女により区別はなく、人々は生来酒を好む。大人が尊敬される所作を見ると、ただ手を打つことで、中国の跪拝に相当させている、と伝えている。その後「その俗、正歳・四節を知らず、但だ春耕秋収を計りて年紀と為す」とある。この当時暦がなく、倭人は正月や四節を知らず、生産暦で年を数えていた、というのである。神拝作法に今も残る拍手の起源を知るうえで貴重な記録であるが、「とし」という日本語は、本来稲の実りを意味し、後に一年を意味するようになった経緯からして、それを裏付けている。律令国家時代の祈年祭（としごいのまつり）は、春先二月に稲の豊作を祈る祭であり、秋の収穫を終えた後に行われる新嘗祭（にいなめのまつり）は、神人共に収穫された新穀を食べ、感謝するものである。

欽明天皇の父君である第二十六代継体天皇の時に、地方の小社の創建伝承が『常陸国風土記』（七二一）にある。夜刀神創祀に関わる伝承である。箭筈氏麻多智という者が、葦原を開墾して水田を造ろうと工事を進めていると、夜刀神が群れて押し寄せて妨害する。夜刀神は、蛇の姿で頭に角があり、見ると家を滅ぼす災いがあるという。麻多智は、怒り甲冑付け、矛を執り、夜刀神を打ち殺して、山口まで追い払った。そこで境に杭を立て、これより上は神の地とし、下は人の田としよう。以後、私が神の祝として、永遠に祭りを行うことにする。どうか祟ること恨むことのない様に、として社を設けて初めて祭りを行った。

夜刀神の伝承が残る社は、水源に祀られた小さな神祠で現在も地元の人に信仰されている。多くの神社の立地は、

集落の中ではなく、集落と海山の境に求められた。自然の中に神を発見し祀ってきた姿がここにある。その意味でこの神社創建伝承は、典型的なもので、東国地方の開拓が進み、稲作文化が広がって行く様子が伝わってくる。

さてそこで社が設けられたのだが、その形はどの様なものであったろうか。福山敏男の指摘するように常設の神殿は未だなかったのではないだろうか。『万葉集』には神社、社の文字が見えるが、何れも「もり」と読ませている。

哭澤の神社（もり）にみわすゑ祷祈めど我が王は高日知しぬ（巻二）

木綿懸けて斎くこの神社（もり）超えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに（巻七）

山科の石田の社（もり）に布麻置かばけだし吾妹に直に逢はむかも（巻九）

これらの歌は、神祭りの場所が神社、社と表記されたが、実態としては「もり」であったことを示している。今日、鎮守の森と呼ばれる空間を意味していて、常設の社殿は未だない状況を表しているのだろう。

神々を祀る施設を神社と言っているが、神社という言葉の成立は、意外に新しく、七世紀後半に律令の編纂と共に創造された、とされている。漢語で神々の事は天神地祇という。天神は昊天上帝、日・月神などを意味し、地祇は土地の神、五穀の神、山や海の神などを表し、天神をまつるには祀、地祇をまつるには祭と区別して使用する。ここから日本では和製漢語、天神をまつる天社、地祇をまつる地社という言葉が生まれ、天つ神に対して国つ神ということから、国社という言葉が生まれた。また天神から神社、地祇から祇社という言葉が生まれた。これらはすべて『古事記』『日本書紀』『古風土記』の中に見える言葉である。これらの言葉の中から、神社の語が神々をまつる施設名として統一され定着した、と考えられている。

神社社殿の成立もこの頃で、仏教伝来以後、仏像を安置する仏殿の影響を受けて、神々をまつる施設としての神殿が造られるようになる。その際、固有の伝統的な建築様式を復古的に用いただろうことが想像できる。

畿内及び諸国に詔して、天社地社の神の宮を修理せしむ（『天武天皇紀』十年）

使を遣わして、神社を天下諸国に修造せしむ（『続日本紀』天平神護元年）

これら神社修造の記事は、『古事記』に見える「修理固成」（新たに造り固めること）に通じ、新造営の意味に理解するのが良い。古代律令国家時代には、盛んに有力神社の社殿が造営されたのであろう。

今日残された神社建築で最古のものは、京都の宇治上神社の本殿で平安末期の造営、拝殿は鎌倉前期の造営で、いずれも国宝に指定されている。以外に古い建築遺構は残っていない。これは神社の特徴で、神々の住まいは常に清々しく保たれなければならない、とされて修造や立替を行うことが当然とされたからである。

3、式年遷宮にみる祭祀伝統

神社の祭祀伝統は、稲の生産暦を基盤に発達してきた。従って毎年繰り返される循環構造を持っている。祭りは、祭神と呼ばれる神霊に対して、食物や衣料を供えて、命を支える五穀の豊作を願い感謝を捧げ、日々の生活の平安を祈る行為である。モリと呼ばれる聖域に、神々を迎えて、御馳走でもてなし、人々は神威に触れることで、活力が付与される。生きる力が与えられるのである。

祭りが成立する前提として、徹底した清浄が求められた。海の潮に浄めの効果があると信じられてきた。田畑で生産に従事する労働は泥まみれになることを前提にしているので、清めは必要不可欠でもあった。モリの中にある神社という環境からは、掃除が不可欠であり、清めの行為を意味あるものとして発展させた。激しい風雨の後の境内は混沌の極みで、掃き清めることにより秩序が回復される。清らかな場所こそ聖域に相応しいとして、清流の傍らに立地する神社も多数ある。身心の汚れを嫌い、清浄を尊ぶところから、正直に価値を置く倫理観を発達させた。

春夏秋冬の四季が明確に循環する環境の中で、「春耕秋収」という生産暦が根付き、稲作農業を発達させた。時間は常に循環して、新しい春を迎えて、新たな生産が始まる。原点に戻り新たな時が刻まれて行く。こうした循環構造が古儀を尊ぶという文化を発展させた。全国に点在する古社の祭りにそのような世界観が生きづいている。ここでは伊勢神宮の式年遷宮を具体例として考察して行きたい。

伊勢神宮の創始については、すでに述べたが、垂仁天皇二十五年と伝えている。「時に天照大御神、倭姫命に誨へて曰はく、是の神風の伊勢の國は、常世之浪重浪歸する國なり。傍國可怜國なり。是の國に居らむと欲ふとのたまふ。故れ、大神の敎の随に、その祠を伊勢國に立てたまふ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。」(『垂仁天皇紀』)別伝によれば、鎮座の日を九月十七日と伝えている。この日は神宮の最重儀である神嘗祭が行われる当日である。以来、神宮は独自の発展をして行くことになる。

第二十一代雄略天皇の時代(五世紀)、天照大御神は再び天皇に神託されて「吾れ一所のみ坐せば甚苦し、加へるに以て大御饌も安く聞こし食さず」(『止由気宮儀式帳』)と述べられ、丹波国より豊受大神が迎えられて、食事を司ることになる。外宮の鎮座であり、これより外宮の神域に御饌殿が設けられ、日々の食事を天照大御神及び相殿神に奉る祭り、日別朝夕大御饌祭が行われることになる。伊勢神宮が、天照大御神の常住の神の宮と位置付けられてゆくと、当然朝夕の食事を差し上げなければならないとして、このような御饌津神による祭りが成立したのであろう。神饌を司る神による神供であり、最も丁重な形をとったのである。

神饌を調理するのは忌火屋殿で、ここで毎朝浄火(忌火)を鑽り御飯を炊ぎ、入浜式塩田で作った御塩、上御井神社から汲んだ浄水を供える。食器は「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器で、その都度新しいものが使われる。

この約二百年後、持統天皇四年(六九〇)に式年遷宮が始まる。この制度は第四十代天武天皇の宿願により立制されたという。「二所太神宮の御遷宮の事は、廿年に一度、応に遷御せしめ奉るべし、宜しく長例と為すなり」(『神宮諸雑事記』)と伝えられている。その二年後に外宮の遷宮が行われた。先ず内宮を行い、二年後に外宮というのが決まりであった。ここでは内宮を中心に話を進めて行く。式年遷宮とは、敷地を東西に二つ設け、二十年に一度、社殿、装束神宝の一切を新しく造り替えて、新造された社殿に大神に遷っていただく祭りである。

神宮の社殿は、唯一神明造といい、東西三間、南北二間の切妻平入の高床式の建物である。建物を構造する柱は、礎石を用いない掘立柱で茅葺、屋根に千木・鰹木を載せる。正殿の中央真下に心御柱が埋納されている。心御柱は外か

らは見えないが、かつてはここに向かって神饌が供えられた。社殿は、古代の稲蔵の形式を踏襲したものである。おそらく仏教伝来以降、大御神に相応しい住まい（神の宮）として、復古的に創造されたものと考えられている。

住まいは、常に清々しく保つことが求められるので、二十年に一度造替し大御神に遷御していただくことにしたのだろう。生活を重視する文化は、社殿を装飾する調度、大御神の着物や日常品及び神宝（紡績具、武器武具、琴）の一切を新造することになる。

こうして始められた式年遷宮は、二十年に一度必ず行われて、二百年間順調に継続されて行く。式年遷宮の経費は、神領からの神税によって賄われ、神税が足らなければ正税から支出するのが原則であった。しかし、次第に律令国家の仕組みに緩みが生じ、荘園の増大などが進み、神税正税に不足する事態が生じてきた。二十一回式年遷宮から役夫工米という臨時税によって賄われるようになる。役夫とは造営工事に携わる人々の事で、当時税は米で納められた。こうした臨時税は、内裏の造営や新帝即位に伴う大嘗祭のみに課せられるもので、式年遷宮の重要性を示している。

以後、役夫工米での遷宮が恒例となるが、第二十六回遷宮からは、平家が台頭し武家が政治の中枢を占めるようになり、やがて鎌倉幕府の成立となる。それでも源頼朝の敬神政策もあり、不安定ながらも、こうした体制での遷宮が第四十回まで続いて行く。第四十回式年遷宮は第一〇二代後花園天皇の寛正三年（一四六二）に行われている。その五年後、応仁の乱が勃発して、京都が十年以上に亘って戦場となり、遷宮は中絶してしまう。

しかし、式年遷宮が中絶したからといって、恒例祭祀が途絶えたわけではない。皇室国家からの御沙汰は途絶しても、神宮の神職により、転倒寸前の社殿を補修し雨露を凌いで、仮殿の更に仮殿というべき儲殿を造営して、祭りが継続されていた。

ここで神宮の恒例祭について簡単に触れておきたい。現在、伊勢神宮は内宮・外宮を中心に百二十五社の神社の集合体であり、ここで年間一五〇〇回を超える祭りが行われている。これらの祭りの中で、古来最も大事とされてきたのは、三節祭である。すなわち旧暦九月の神嘗祭、六月と十二月の月次祭である。神嘗祭にはその年の秋に収穫された新穀がお供えされ、二度の月次祭には旧穀を供えることになる。祭式は三節祭どれも同じ内容であるが、新穀を供

えることから神嘗祭が最重儀と認識されている。これに外宮で行われる日別朝夕大御饌祭が重要な祭りということである。

神嘗祭には付属祭があり、神宮神田にて四月に神田下種祭、五月にお田植初式、九月に抜穂祭が古式のままに行われ、つまり水田耕作に合わせて神事が行われ、新穀が収穫され神饌の御料とされる。この新穀で御飯御餅が作られ、御酒が醸され、伊勢志摩の海で獲れた鰒を中心とする魚介で調理された「由貴大御饌」が夕と朝と二回供えられる。その後、勅使によって、天皇の幣帛（絹・麻など）が供えられ国家平安が祈られる。

この神嘗祭にあわせて、二十年一度の式年勢宮も行われてきたのだ。古く式年遷宮は、神嘗祭の当日行われてきた。戦国時代に入り治安が乱れ、式年勢宮を行うための資金が集まらなくなり、社殿が雨漏し転倒の恐れが出ても、神宮の神職限りにて、何とか工夫をして恒例祭は続けられた。そこで平和の兆しが現れてくると、織田信長、豊臣秀吉の寄進や伊勢在住の慶光院上人と呼ばれる尼僧の諸国勧進の結果、百二十四年後の天正十三年（一五八五）第四十一回式年遷宮が再興され、内宮は十月十三日、外宮は十月十五日に行われている。再興以来、外宮も同年に遷宮が行われるようになる。

第四十二回式年遷宮以降は、徳川幕府の寄進により、明治維新より後は国庫からの支出により二十年に一度の式年勢宮は古式のまにまに行われてきた。戦後は政教分離を原則とする日本国憲法が制定施行され、国家管理を離れた神宮は宗教法人となったが、国民奉賛という形で式年遷宮は続けられている。戦国期に百二十三年間中絶した為、この間に古儀が損なわれたので、徐々に復興して行く。幕府は「遷宮条目」（全五条）を定め、その第一条で「古法を守り新儀を企てざる様、堅く申し付くべき事」と基本方針を示している。

二十年ごとの式年遷宮には、大量の檜材を消費する。しかも樹齢二百年を超えた大径木が必要である。この御用材の確保は難しく、御杣山が伊勢から段々遠くの地に求められた歴史からも理解できる。しかし、一方で植林文化を発達させたことも事実である。神話では樹種を蒔いたのは、素戔嗚尊とその御子五十猛命であると伝えている。

明治時代になり第五十七回式年遷宮の時、御用材の確保が難しくなり、掘立柱の工法を改めようとした。コンクリ

ートで基礎を固めれば、二百年の耐用年数となり、この間に檜木の育成が可能になると、明治天皇の裁可を得ようとしたが、祖宗建国の姿を知らしむべしと改正をお許しにならなかった。「昔のてぶり」を厳守して、一方で備林を整備することを命じられたという。高い御見識と拝察するのである。

最後に神宝装束について、付言して置く。社殿を造替するだけでなく、神宝や装束も造替することは、すでに述べたが、古代には太政官に「営造神宝装束使」（略して「造神宝使」）が任命され、神宝や調度の品々は、京都にて蓄積された高い技術により制作された。制作にあたって本様使という古儀を守る制度があった。正殿の中に納められ大御神の御用に供した神宝装束類は、新正殿に大御神が遷御された後、遷御の翌日に「古物渡」が行われ、新造された西宝殿に移される。ここで次の遷宮まで二十年間保存される。造神宝使は、本様使を伊勢に遣わして、西宝殿に納められた旧神宝装束を実見し寸法を執り、同じものを制作する。

丹精込めて制作された神宝装束は、天皇の叡覧に供し、道中お祓いをしながら伊勢に運び、遷御の直前「御装束神宝読合」を行い、現品と目録の突合せを行い、川原大祓の後に神前に納められる。

社殿と同様、千三百年前の最初に行われた遷宮と同じ神宝装束が製作され納められる仕組みがここにある。因みに平成二十五年に行われた第六十二回式年遷宮には、装束類は五二五種一〇八五点、神宝は、一八九種四九一点であり、日本の生活文化の万般に渡るもので、古くからの様々な技術が継承されていると言ってよい。

4、大嘗祭の伝統と意義

神話伝承に起源が示された通り、歴代天皇は「敬神第一」に祭祀を厳守されてきた。第三十三代推古天皇は、摂政を務めた聖徳太子と共に仏教興隆政策を進めたことで有名であるが、神祇祭祀について次のように詔している。「朕聞く、曩者、我が皇祖天皇等の世を宰めたまへること、天に跼り地に蹐して、孰く神祇を禮ひ、周く山川を祠り、幽か乾坤に通はす。是を以て、陰陽開け和ひ、造化共に調へり。今朕が世に當りて、神祇を祭祀ること、豈怠有らむや。故れ群臣共に爲に心を竭して、宜しく神祇を拜ひまつるべし

と。」（『推古天皇紀』）仏教興隆策を推進しながらも、神事優先の伝統はしっかりと守っている。

第三十六代孝徳天皇は、大化の改新を推進し古代律令国家樹立の基礎を固められたが、側近に「上古の優れた天皇の業績を基に天下を治めたいと思う」と述べられ、治める方法を問いかける。すると蘇我石川麻呂大臣が「先づ以て神祇を祭鎮めて、然して後に應に政事を議るべしと。」（『孝徳天皇紀』）答えている。ここでも神事優先の伝統が確認されている。

歴代天皇が最も大事にしてきたのが新嘗祭である。新嘗祭の起源は、高天原で天照大御神が稲作を行い、新嘗を行われている処に求められる。須佐之男命がこの新嘗を行う新しい宮に汚物を撒き散し、神衣を織る斎服殿の屋根から馬を投げ入れるという凄まじい悪戯を行い、ついに天照大御神は岩屋戸に籠ってしまう。新嘗祭への妨害は、秩序破壊の最たるものであった。地上の稲作は、天孫降臨に際し、稲穂を与えられたところに発する。故に稲作とその収穫儀礼としての新嘗祭は、神代由来の神事ということが出来る。

新嘗の祭りは、民間でも行われていたようで『万葉集』（巻十四・東歌）に、新嘗を行うために女性が家に籠り神事を行う様子が詠われている。また、『常陸国風土記』には、「新粟初嘗」のために家に籠り神事を行う処に、祖神が訪ねてくるという伝承を記録している。こうした断片から、民間でも新嘗の神事が広く行われていたことが推定できる。

日本最初の都市が出現した大和の三輪山山麓に位置する纒向遺蹟（三世紀後半から四世紀前半）は、古伝承の纒向珠城宮（垂仁天皇）纒向日代宮（景行天皇）の都が置かれたところで、最古の前方後円墳の所在地である。応神天皇の叔母の倭迹迹日百襲姫命が箸で蔭を突いて死んだと伝える箸墓古墳の所在地でもある。古代王権に深く関わる地域ということが理解できるが、ここから祭祀に関わる建物遺構や祭事終了後廃棄されたと思われる遺物が大量に発掘されている。遺物の内容から稲を脱穀し炊飯して供えて共食することが推定されるという。岡田荘司は「共同体における新嘗の淵源は弥生時代まで遡ると思われるが、体系的な新嘗は纒向に開花したとみられる。」と推定している。現代に続く新嘗祭の源流は、三世紀後半にまで遡れるということである。

こうした祭祀伝統を基にして、八世紀初めに古代律令祭祀が成立してくる。律令祭祀は、大和の古社や伊勢神宮で

行う祭祀、全国の神社に幣帛（絹麻など）を供えるための祈年祭などの班幣祭祀、都城の平穏を祈る祭祀、天皇が親祭する新嘗祭などの祭祀、六月・十二月に行われる大祓と天皇の即位儀礼について定めている。一般行政を行う太政官に対して、神祇行政を担う神祇官が置かれ、これらの神祇令に定める国家祭祀全般を担った。

古代律令祭祀の特徴は、唐の律令（祠令）に学びながらも、固有の神祭りの伝統を重視していることである。祈年祭は律令祭祀の確立と共に始められた国家祭祀であるが、神名帳という全国神社のリスト（『延喜式』によると三、一三二座の神々）を作成し、各神社の神主・祝部に上京してもらい、神祇官にて国家からの幣帛を班ける祭祀を行うものである。この頃、全国にはたくさんの神社があり、それぞれの地域や氏族の崇敬を得ていた、それらの神社に春二月に班幣祭祀を行い、それぞれ幣帛を持ち帰り、神前に供えて豊作を祈らせたのである。国家の繁栄、国民の平安は、豊作により保障されるからである。在地もしくは各氏族の信仰を尊重し、このような班幣祭祀が生み出されたのであろう。

また、天皇の即位儀礼である大嘗祭を神祇令に定めていることで、神祭りの伝統は皇位と密接不可分であることを示している。すなわち「天皇位に即きたまはば、惣て天神地祇を祭れ。」とあり、更に「凡大嘗は、世毎に一年なるは、国司行事せよ。以外は年毎に所司行事せよ。」とあるのがそれである。毎年の新嘗祭の伝統のうえに、即位儀礼としての大嘗祭が成立し、その行事を取り仕切るのは国司とした。毎年の新嘗祭（神祇令では大嘗と記す）は所司である神祇官が行事を担当するのである。

この即位儀礼としての大嘗祭は、天武・持統天皇の時代に確立したとみられている。おそらく伊勢神宮の式年遷宮の立制とも密接に関係している。この時代は古代律令の確立期で唐の制度や新技術、文物及び仏教文化が輸入され、皇室を中心とする中央集権国家の国造りの最中であった。日本固有文化や神祭りにも自覚や反省が起こり、伝統に基づき新たな試みが行われたのだろう。大きな変革期を迎えて、日本文化の原点を顧みて、固有の伝統を自覚した結果、『古事記』や『日本書紀』の編纂、神宮の式年遷宮の立制、即位大嘗祭の創生などに繋がっていった、と考えられる。

古代からの新嘗祭の伝統から、即位大嘗祭が成立してきたわけであるが、その概要を説明したい。毎年行われる新

嘗祭は、皇室の御領である御田から収穫されたお米で御飯や御酒を調製して供える。これに対し即位大嘗祭では、都を中心に日本列島の東を悠紀地方、西を主基地方として、悠紀国、主基国を卜定して斎田を決め、ここで稲作を行う。これを国郡卜定という。すべて国司の管理下で稲作が行われ、神供のお米が栽培される。八月には大祓使が諸国に遣わされ、国の大祓が行われ国中が清められ、天神地祇に奉幣が行われて、大嘗祭が行われる旨奉告される。大嘗祭が国家規模の祭祀であることを示している。

収穫の秋を迎える九月には両国に抜穂使が遣わされ、抜穂が行われ新穀を都へ持ち帰る。

十月天皇は、川原に行幸して御禊を行い、心身を清められる。平安時代の御禊は、皇太子や公卿をはじめとする官人一五〇〇名が供奉する盛大なものであった。

十一月に入ると祭場となる大嘗宮の建設が行われる。『貞観儀式』によると、大嘗宮は、大内裏の朝堂院と呼ばれる政府機構の立ち並ぶ場所に立てられた。朝堂院の政庁である大極殿まえの広場である。祭の行われる七日前から悠紀・主基両国の人々が上京して工事に当たり、五日間で完成させた。瓦葺の豪壮な中国風の建築群が立ち並ぶ広場に、以下のような素朴な祭場が設けられた。

大嘗宮は、祭場となる悠紀殿、主基殿と、天皇が潔斎をされる廻立殿からなる。悠紀殿、主基殿は、黒木の柱、茅葺、屋根に千木・鰹木をのせ、壁には蓆を張り、床は土間形式であったが、平安時代後期から床を張る構造になった。悠紀殿、主基殿ともに東西二間、南北五間で、内部は二部屋に別れ、奥の三間の部屋が室（内陣）で、手前が堂（外陣）と呼ばれた。大嘗祭が滞りなく行われると、この大嘗宮は直に破却されお焚き上げされた。

大嘗祭は十一月下卯日（もしくは中卯）行われる。前日には天皇の御魂を鎮めるという鎮魂祭が行われる。当日酉刻（午後五時～七時）内陣に神座が準備され、灯籠に火が入れられる。神座は二つあり、第一の神座は寝座であり、坂枕、衾が置かれる。その傍らに第二の神座（短畳）が設けられ、その前に天皇の御座が敷かれる。

戌刻（午後七時から九時）天皇は、廻立殿に入り御湯を浴びて清め、御祭服を著けられる。御祭服は純白の束帯で、幞頭という冠である。準備が整うと廻立殿から悠紀殿に渡御になる。大臣に先導され、菅蓋をかざし、葉薦の上を歩まれて進む。天皇が歩むにつれて葉薦を敷き延べ、進むに

従って巻き上げて行く。天皇が悠紀殿の外陣に着くと古風（国栖の人等が奏する歌）、国風（悠紀・主基地方の風俗歌）などが奏される。

亥一刻（午後九時頃）準備されていた神饌が行列を組んで、膳舎から悠紀殿に運ばれる。神饌行立の列が悠紀殿に着くと、天皇は外陣から内陣に入られ、神座に相対する御座に着かれる。御座はやや東南を向いていて、神座の背後は伊勢神宮の方向となる。天皇は御座に着かれると、先ず采女の介添えで御手水を行う。その後、神座のまえに神膳を供える神食薦、御座のまえに御食薦が敷かれる。

天皇は陪膳采女、後取采女の補助により、準備された神饌をお供えになる。神饌は窪手という柏葉で出来た箱に納められ、やはり柏葉で出来た丸皿に、天皇自ら御箸で取り分けられ、陪膳采女を介して、神前の神食薦の上に並べられる。お米と粟の御飯、鮮物（鯛・烏賊・鮑・鮭の切身）干物（干鯛・堅魚・蒸鮑・干鰺）、御菓子（干柿・搗栗・生栗・干棗）・鮑汁漬・海藻汁漬・白酒黒酒・お米と粟の粥と続く。この神膳をととのえる作法に約一時間半かかるという。その後「国安かれ民安かれ」と祈られ、称唯低頭され拍手、神に備えたものと同じ御飯と白酒黒酒を召し上がられる。神人共食である。称唯とは、「おお」と発声し、目上の者への返答の所作である。まさに天照大御神の神勅の対する御返答と理解することが出来る。

亥四刻（午後十時半頃）、撤饌、再び御手水があり悠紀殿の儀は滞りなく終了する。天皇は廻立殿に帰り、再び湯を浴びられ、新しい御祭服を著けられて、主基殿の儀に望まれる。

寅一刻（午前三時頃）から、悠紀殿の儀と全く同様の神膳作法を繰り返す。そして辰日卯一刻頃（午前五時頃）すべての祭事を終えるのである。

今日の大嘗祭も基本的には、同様の次第作法で行われている。古来からの新嘗祭を基礎に天武朝に始まった即位大嘗祭は、その後御歴代の即位に当たって必ず行われたが、第一〇三代土御門天皇の文正元年（一四六六）の大嘗祭を境に断絶してしまう。翌年、応仁の乱が勃発し京の都が十年以上戦場になり、治安は極度に悪化し、戦国乱世の時代になって行く。以後、第一〇四代後柏原天皇から九代二二一年間、大嘗祭は行うことが出来ない状態が続く。しかし、御歴代の神々への信頼と「廃れたるを興す」強い意思とによって、第一一三代東山天皇の御即位に当たり、大

嘗祭は復興し、次代の中御門天皇は行われなかったが、桜町天皇の時に再復興して、今日の今上陛下の大嘗祭に至っている。

新帝が即位すると、秋の収穫を待って必ず大嘗祭が行われて来た。新嘗祭を基盤に成立した大嘗祭を御歴代が繰り返し行って来たのである。七世紀後半の祭式次第・作法所作の祖型を反復してその祭に込められた心を伝えている。

むすび

七世紀半、蘇我氏が強大な権力を握り、皇室の統治に挑戦し、崇峻天皇の弑逆、聖徳太子一族の滅亡など不安定な国情になっていた。一方、大陸では隋・唐が国内を統一して強大国家となり、朝鮮半島の国々は不安定となる。日本への仏教伝来はこの時代のことである。中大兄皇子、中臣鎌足は連携して蘇我氏を滅亡させ、皇室を中心とする中央集権国家確立への動きを活発させる。大化の改新と呼ばれる改革運動で、これまでの豪族による合議政治ではなく、公地公民制、国郡制、班田収授の法、租庸調という税制など国家の仕組みを根本的に変えて行く大改革であった。この間に隣国百済再興のため、半島の白村江に兵を送り、唐・新羅連合軍と戦い完敗してしまう。国防の危機であると共に、国家意識は当然昂揚したに違いない。危機意識は、大宝元年に大宝律令の施行となり、古代律令国家は確立し、改新の政治は目標を達成することになる。国家永続発展の基盤が整備されたのである。

この時代に神宮の式年遷宮が始まり、即位大嘗祭も整備された。いずれも天武天皇の御意思が関わっていると考えられる。律令祭祀を整備する中で、固有の伝統が顧みられ、国家儀礼として再編整備されたのである。神宮の式年遷宮も天皇の即位大嘗祭も、それらの祭祀を支える毎年恒例の祭祀に支えられて、七世紀後半に成立した時の形（祭式作法）そのままに祖型を反復して、今日に至っている。神話伝承は祭祀を継承することで、現在に蘇っていると言っても良いだろう。神話が伝える国家理想（天壌無窮の発展）がその都度確認されているのである。

皇室や神宮の祭祀伝統から類推すれば各神社の創祀、発展の経緯も凡そ想像できる。祭祀を主宰する氏族、地域社会の発展に応じて、素朴な森の中の祭祀形態から、社殿が造営され、経済発展に伴い、整備されていった。ただ神社

の場合、原初の形を尊び、それを残し継続させている。未だに社殿を持たない神社もある。

宗教の違う異民族の侵略を受けなかったことは、固有の信仰を断絶することなく緩やかに発展させる大きな要因でもあろう。政治対立や戦争によって、廃された神社は、殆ど無い。同じ宗教意識を共有しているため、そうした行為とは無縁なのである。

参考文献

岡田荘司編『日本神道史』（吉川弘文館）
福山敏男『神社建築の研究』（中央公論美術出版）
西田長男「神社という語の起源そのほか」（『日本神道史研究』８巻）
茂木貞純『日本の暮しと神社』（神社新報社）
沼部晴友・茂木貞純編著『神道祭祀の伝統と祭式』（戎光祥出版）
中西正幸『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』（大明堂）
岡田荘司『大嘗祭と古代の祭祀』（吉川弘文館）
國學院大學学術資料センター編『資料で見る大嘗祭』